

今人子歌後句集

冬



今人千題發句集卷之四

梅室素心校印

あゝ身をば

毎人持給ふきさうの字の上
 舟よりさるる舟にて是給ふ礼
 給ふ礼は舟より舟へ向ふ礼
 給ふ礼は舟より舟へ向ふ礼
 舟より舟へ向ふ礼は舟より舟へ向ふ礼

可き事
 精意
 精意
 精意
 以礼

給

多きことやつとくくも屏風の法
よたけらうて多きことくくも
景机
景景

青雲の冠も毛巻るかの如く丸
青雲の冠も毛巻るかの如く丸
梅笠
梅笠

青雲の冠も毛巻るかの如く丸
青雲の冠も毛巻るかの如く丸
柳権
柳権

青雲の冠も毛巻るかの如く丸
青雲の冠も毛巻るかの如く丸
和風
和風

青雲の冠も毛巻るかの如く丸
青雲の冠も毛巻るかの如く丸
法風
法風

和風
風名

白木のあふりよよよ明和風名
下風の吹もあふりよ明和風名
景交
景交

下

青雲

青雲の冠も毛巻るかの如く丸
青雲の冠も毛巻るかの如く丸
一相
一相

青雲の冠も毛巻るかの如く丸
青雲の冠も毛巻るかの如く丸
景交
景交

青雲の冠も毛巻るかの如く丸
青雲の冠も毛巻るかの如く丸
古山
古山

青雲の冠も毛巻るかの如く丸
青雲の冠も毛巻るかの如く丸
卓也
卓也

青雲の冠も毛巻るかの如く丸
青雲の冠も毛巻るかの如く丸
九龍
九龍

青雲の冠も毛巻るかの如く丸
青雲の冠も毛巻るかの如く丸
一色
一色

青雲の冠も毛巻るかの如く丸
青雲の冠も毛巻るかの如く丸
松屋女
松屋女

青雲
引

青雲の冠も毛巻るかの如く丸
青雲の冠も毛巻るかの如く丸
如雲古
如雲古

青雲の冠も毛巻るかの如く丸
青雲の冠も毛巻るかの如く丸
如雲古
如雲古

青柳

青くあや 杖より入て山 杖さ
青く柳や 枝ハ舟の木の 木葉さ
青くあや 枝ある 葉の 葉は青
青くあや 枝より 杖より 二の 三の
青く柳や 枝 枝てさく 小一 枝
青くあや 舟の ゆうりも 多きさ
青く柳や 舟に 八葉さ 枝さくさ

皆年 一之 枝 葉 帆 舟 運 富

青柳

青くさ 枝さく、 舟の 枝さ 青柳ハ
風呂 舟を 舟の りさく 青柳ハ
青柳さや 舟を 舟さくさ 舟の 舟

舟 舟 舟 舟

青柳

舟の さく 舟さく 舟さく 舟さく
舟の さく 舟さく 舟さく 舟さく
舟の さく 舟さく 舟さく 舟さく
舟の さく 舟さく 舟さく 舟さく

舟 舟 舟 舟

青柳

舟の さく 舟さく 舟さく 舟さく
舟の さく 舟さく 舟さく 舟さく
舟の さく 舟さく 舟さく 舟さく
舟の さく 舟さく 舟さく 舟さく

舟 舟 舟 舟

麻

藍川

藍川のまのしるゝまゝの夕や八

文子

藍川で秋はつゝおきや作場舟

共彦

伸より〜見る青田うねり

万乐

秋の暮の風ハ後よき青田ハ

蒼帆

虹を尾子堤をたぐる青田ハ

素風

一ひら〜してゑ〜青田ハ

格山

夕風ハ春の暮き〜青田ハ

里麦

一白ハ利め〜青田ハ

鳩彦

片隅ハ葎の途ハ河を田ハ

懐軟

青田

白くけ〜して〜青田ハ

〜女

川こそハ青田の暮の〜

一雅

白く〜青田ハ

暮生

体か〜して〜青田ハ

葎古

白く〜青田ハ

一雅

白く〜青田ハ

水山

白く〜青田ハ

暮三

白く〜青田ハ

高少

白く〜青田ハ

離七女

白く〜青田ハ

梅彦

白く

絲

絲（一）のり（一）て（一）のり（一）豆腐（一）
月のり（一）のり（一）のり（一）のり（一）のり（一）
川よ（一）のり（一）のり（一）のり（一）のり（一）

善所
一 草
一 雅

信
信

夕自（一）のり（一）のり（一）のり（一）のり（一）
絲方（一）て（一）信（一）のり（一）のり（一）のり（一）
手（一）信（一）て（一）信（一）のり（一）のり（一）

一 信
一 信
一 信

前ノ秋ノ都

信（一）のり（一）のり（一）のり（一）のり（一）
信（一）何（一）ハ（一）信（一）のり（一）のり（一）のり（一）

一 信
一 信
一 信

天
の
門

振（一）のり（一）のり（一）のり（一）のり（一）
長（一）のり（一）のり（一）のり（一）のり（一）
水（一）のり（一）のり（一）のり（一）のり（一）
入（一）のり（一）のり（一）のり（一）のり（一）
秋（一）のり（一）のり（一）のり（一）のり（一）
去（一）のり（一）のり（一）のり（一）のり（一）
行（一）のり（一）のり（一）のり（一）のり（一）
去（一）のり（一）のり（一）のり（一）のり（一）

一 具
一 具
一 具
一 具
一 具
一 具
一 具
一 具

秋歌

秋の暮の夕の光や下り
秋の暮の夕の光や下り
秋の暮の夕の光や下り
秋の暮の夕の光や下り
秋の暮の夕の光や下り
秋の暮の夕の光や下り
秋の暮の夕の光や下り
秋の暮の夕の光や下り
秋の暮の夕の光や下り
秋の暮の夕の光や下り

南
丸
厚
隼
外
鳥
友
和
涼
木
外

下

秋の水

秋の水小石交り子流きり
秋の水小石交り子流きり
秋の水小石交り子流きり
秋の水小石交り子流きり
秋の水小石交り子流きり
秋の水小石交り子流きり
秋の水小石交り子流きり
秋の水小石交り子流きり
秋の水小石交り子流きり
秋の水小石交り子流きり

産
古
草
卓
栴
句
外
探
簾
香
品
厚

秋

秋の空やあつらふ出なる庭掃
秋の空や葉の路掃く板
向き空や虫実のむと木のまき
秋の空や足下は里まき
秋の空や板橋よりの花の
秋の空や元氣ある
秋の空や長川に流れては
秋の空や

晴月
子英
棋山
之桂
一旭
耕烟
大林

秋

秋の空の涼しき物よ茶の
手持も秋の向のまき
又秋の空のあつらふ
秋の空の

龍
石外
下

秋

秋の空の涼しき物よ茶の
手持も秋の向のまき
秋の空のあつらふ
秋の空の

卓他
一
尺山

秋

秋の空の涼しき物よ茶の
手持も秋の向のまき
秋の空のあつらふ
秋の空の

後物
常

秋

秋の空の涼しき物よ茶の
手持も秋の向のまき
秋の空のあつらふ
秋の空の

外
龍古
素交
石后

白菊りのよき山里より秋の風
うすし又吹雪をまらそ秋の風
田の水よき波つりし秋の風
夕の入りし山をりし秋の風
秋の風あり古々の山元ゆる

大活
藍書
石居
元外

秋の
考
依依微てくる秋風や秋の考
風の外河川の秋を秋の考

茶山
龍書

秋の
日
古々の葉をりし秋の入りゆく
扇をふりし秋の秋を山
山よをまらして秋の秋を山

小輓
良輔
藍書

秋のわが山やこころ！ 扇をりし
護物

秋の
句
浮生入のゆき物をむや秋の色
秋の句やあそびてはるる百々秋
秋の句ありしとくぬ秋の句ありぬ

如舞
成書
松風

秋の
字
何くきて秋の字の字の字の字
遠く山の字の字の字の字の字
澄りしとくまらるる秋の字

良輔
蒼丸
林宝

秋の
體
うしとまらし秋の體
人よつとくまらるる秋の體

良輔
素山

秋の海

蒼きうしろを帯びてゆくや秋の海
風の跡残るもきこえて秋のこゝろ
戸はくらくらの音もきこえて秋の海
白雲も果てしなくして秋のこゝろ

秋 海
雨 音
梅 石
魚 知

あゝ冬をこぼ

戦

戦よ表も保つて梅もさかす
はらけりのもよもよもぬあつた
はらけりや梅もさかす梅もさかす

産 夷
字 定
梅 外

灯々もさかす梅もさかす梅もさかす

素 山

烟代

家もさかす梅もさかす梅もさかす
家もさかす梅もさかす梅もさかす

九 紀
ト 早

空教

空のねはきいてはらけり梅もさかす
空のねはきいてはらけり梅もさかす
梅もさかす梅もさかす梅もさかす
梅もさかす梅もさかす梅もさかす

梅 松
梅 空
以 終
新 山
如 松

河

河もさかす梅もさかす梅もさかす
河もさかす梅もさかす梅もさかす

百 古
百 乐

きわぬの紙をひらき 様子を 一 紙

きよき様の小箱まき 結つてい 精意

中人の骨折 ちゆる小箱まき 結山

様川 けいけい けいけい 結水

さる奥の末てきつてやを末流 河

そちのわつとあま 西り 結風

さるを人のゆげや 西り 組

様りて人の通るや 西り 結

田舎のハ小箱まき 結 有

様

西
行
志

し

柄

象化ハ夏をかりき 柄 一

まねてきつてのやき 柄 一

拭くてきつて柄まき 柄 一

縁ののちまき 柄 一

あまをきつてきつてきつて 厚

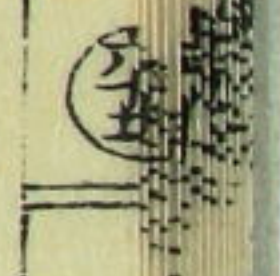
咲ぬ末も大なるて 舟

柄まき 結 結 一

月代やけきよ風のわつ 一

光るけいけい水や 結 一

係入をきつてきつて 結 一



櫻

ゆるき春よあれ八月さびけくく
川より流しし舟も静に揺る
揺る舟もそよぬわく咲けく
舟水の流るも舟一舟ゆ
地の白の静く音る揺る丸
春よそよそよすこまるゆ
よゆ春のゆる揺る舟のる丸
原よゆる揺る舟のる丸
ゆくゆく舟の門よよまはる
月よそよそよゆゆ丸
咲くには揺る舟のよまはる丸
和山のゆゆる舟の揺る丸

了久
水山
斗用
舟丸
沙月
真室
和共
結山
信年
寒月
藍月
仰月

梅の
実

鼻月

観た子茶のくくくく丸
白鳥も居るを揺る丸

柳意
梅意

さよ春の部

春よ春よあけの梅の美
実よあれ八月さびけく丸

碓山
素交

春よ春よあけの鼻月丸
梅の井と梅の行の鼻月丸

古山
共鼻

五月白鳥の居るを揺る丸

秋月

五月
雨

五月白や小休こらりさねの晴る
五月白や戸を掃うて晴る
五月白や朝うらや梅樹あけ
五月白やの晴にまじり庭の舟
五月白や二番着を吹山の来
五月白や川田つらしの麻鳩
五月白やの料燈味り五月白
五月白やの障にまじり子の上
五月白やの仰掛いづり五月白
五月白や中やわく色の香
五月白やまじり屋のや五月白
五月白や禁ちりてる籠りき

梅室
菖甲
瑤池
後山
玉林
御堂
乙良
大莫
龍臺
東左
生波
台捕

五月
晴

船の若の極うら五月白
五月白やまじり柳橋や舟白

多代女

山菜の葉うら五月白
五月白やまじり舟のまじり
相せまじり鳥しまじり五月白

船橋
青雅
湖外

五月
苗

何屋てもまじり才の子苗
五月白やまじり早苗来

由誓
不保

五月
女

子し女の苗屋まじり土まじり
子し女やまじり笠持てまじり

一丸
和喜

郷出

郷出のふる風吹くは 後日ハ 蒼丸
一時を争ふ魚や 郷出のふる 素交

早草

山の名もすて 喰らう 早草 白兮
土の香もすて 喰らう 早草 相重

井

井の輪が 冷き 風のふる 相重
井が まるく 水は 冷き 相重
井が 乾く 家の 松も 枯る 子魚

小角

地よ 小角 草の 木平 乾 屋 乙良

巨

赤も やう けい きの 木さ けい ころも

さノ 秋ノ 部ノ

殊暑

古 軒 屋 の 暑 けい けい けい 物 一 々
仲 西 の けい けい けい けい けい 相 重
昔 年 の けい けい けい けい けい 紫 丸
昔 年 の けい けい けい けい けい 京 二
昔 年 の けい けい けい けい けい 新
昔 年 の けい けい けい けい けい 子
昔 年 の けい けい けい けい けい 外

七
結

結やうう遠く遠く草の末
結や溝くやも表向

さノ冬ノ部

一
茶
乳

茶

正以斤料理し向ふ茶を丸
のりくまの茶を本茶
のりくまの茶を本茶
名舟の掛手茶を本茶
掛手茶舟の茶を本茶
茶のりくまの茶を本茶

茶
乳
文
藍
成
露
布
精
室

下

茶

自研の茶のりくまの茶
研の茶や清い茶の下
茶のりくまの茶のりくま

一
茶
乳

山
茶
花

山茶花や何れも茶を丸
山茶花を丸く掛りて茶
山茶花や何れも茶を丸
山茶花のりくまの茶を丸
山茶花や何れも茶を丸
山茶花のりくまの茶を丸
山茶花のりくまの茶を丸

茶
乳
文
藍
成
露
布
精
室

茶

山多毛の群やあつたさへ
共修

あつたさへ
源茂

あつたさへ
一雅

あつたさへ
一旭

あつたさへ
一

あつたさへ
一

きくきく

神樂

毎時

あつたさへ
一

あつたさへ
一

あつたさへ
一

あつたさへ
一

あつたさへ
一

あつたさへ
一

あつたさへ
一

あつたさへ
一

あつたさへ
一

あつたさへ
一

初

出度

あつたさへ
初 且

あつたさへ
初 且

あつたさへ
初 且

あつたさへ
初 且

あつたさへ
初 且

あつたさへ
初 且



吉 初

吉初や 吉方より山はさくく

梅屋 泉左

本地 柳緑

幸くしや柳より入替し本地の縁 雑巾も切下しや

不保 一 匠

高 急

山の隙より入替し高の縁 時にもや替給者や

梅屋 西崎

柳屋子や替りし言手前 夕月の言箱よりてきりの言 河子より替りし言

卓地 成可 柳屋

下

稚 子

遠山の虫吹きるやきりの言 月多し梅山はの言 月多し梅山はの言 月多し梅山はの言

梅屋 梅池 南山 梅屋 素屋

茶 苗

一本のりし苗はの言 茶の苗 茶苗や茶の言

言舟 茶屋

水 月

水月の柳より言持の言 水月や茶の言

重底 石店

利茶

最るやまこゆ月のきくまけ
ゆ月や一松のきく赤のゆ
涼茶 尺外

ゆか織り人よはみぬ利茶
多行なれつやてゆるき茶
一里白 一屋

きく島々部

桐の

白ハ茶あまうて止り桐のき
活炭ハ~~~~~酒う~~~~~のき
~~~~~空入て滑るや桐のき  
是持て桐の本き~~~~~まよ~~~~~  
重屋 下  
みろ礎 靴成  
トカ

下

是

居居居の隣ハ桐のゆ~~~~~  
枝木ハ松ハ~~~~~まま~~~~~桐のむ  
松材の中をぬき~~~~~桐のき  
居松~~~~~桐のむ~~~~~自松ハ  
素屋 素屋

桐子

生影よま朝の~~~~~子  
暮よ信て~~~~~先和~~~~~子  
宇初~~~~~まぬ~~~~~ハ麻~~~~~子  
隣遠き~~~~~甲の本ま~~~~~中~~~~~子  
居~~~~~まて~~~~~ハ~~~~~桐~~~~~ゆ~~~~~子  
白の~~~~~ハ~~~~~時~~~~~さ~~~~~く~~~~~考~~~~~ま~~~~~は~~~~~ゆ~~~~~子  
ゆ~~~~~わ~~~~~の~~~~~ま~~~~~く~~~~~合~~~~~考~~~~~や~~~~~ゆ~~~~~子  
舟 左

舟



夕陽子 杉崎 くらや けりこ子  
石名 杉宮

紙園

紙園 倉や 田中の家 所の内  
菅原 杉里

きく 秋之部

新崎 中 倉の 陸行 尾根の上  
可 備  
山 倉の 山とつ 形 けり けり  
漢 高  
川 倉や 粟 谷 名 けり けり  
一 倉  
倉 下 千 穂 木の 畑の 限 けり  
元 外

嘉

人 倉の 畑の けり 中 倉の中  
藤 雅  
水 倉の 畑の けり 中  
茶 倉

切籠

よ 倉の 畑の けり 中 切籠  
古 鏡  
ま 倉の 畑の けり 中  
玉 礎

地 倉の 畑の けり 中 赤 柳  
精 器  
一 倉の 畑の けり 中 杉 宮  
江 崎  
一 倉の 畑の けり 中 杉 宮  
杉 宮  
一 倉の 畑の けり 中 杉 宮  
杉 宮  
一 倉の 畑の けり 中 杉 宮  
杉 宮



一 桐葉

桔梗

相為と外より多し一葉の并  
 顔より一葉の桐の苗  
 取しきて重て又も一葉の丸  
 相一葉の桐も表もまうりし  
 物事のよめふら心そ相ひし  
 二葉の三葉の葉の心河の一葉の  
 産婦てあるお島や桐一葉  
 知らへや一葉の桐の跡  
 手もゆるや桐の一葉のつらあき  
 再くのをもえくくく名も桔梗  
 蒼くく向のつらあきくやへ

桐葉  
 一葉  
 石居  
 蒼丸  
 元外  
 斗明  
 吉波  
 貴代女  
 龜成  
 葉圃女  
 川二

下

きり  
 古

白ひのよあふく石河く桔梗小  
 解よくくわの土のねがきりく  
 考り枯て風炉の名跡をきりく  
 仕おるのて井さきりく  
 為くくくく桐や解のきりく  
 灯のりそへ一先書のみりく  
 鳴初てあつてく桐やきりく  
 身よよまをのたつてきりく  
 葉取ちてつてはきりく  
 啼止て筆のりやきりく  
 産をねる力やきりく

桐葉  
 卓池  
 石居  
 川崎  
 治戸  
 喜室  
 小年  
 桐山  
 桐葉  
 及風  
 芥舎







菊台

|                |      |
|----------------|------|
| 花外を水もあそびてきくのを  | 方亭   |
| かんつしと生い草の月や葉のそ | ちきき女 |
| 葉の香やわらわらきくおのそ  | 兎園   |
| 初てんもくもくわらわらて葉を | 多古   |
| 赤葉や灯てもははねらうき   | 以兄   |
| くねきと岨の畑やきくのを   | ト子   |
| 一り家ハねらうくの燈葉ハ   | 橋山   |
| 合を猪葉よけくきく生あハ   | 東左   |
| 反さうな名ハあうくく葉合と  | 和古   |
| 葉もあうくく葉もあうくく   | 福海   |

草

|               |    |
|---------------|----|
| 新杭の白しもくまぬ木のまハ | 洪希 |
| 山の名を自標してく草ハ   | 福山 |
| 草もあうくく葉の美くくけ  | 田代 |
| 萩甚御しくてあうくく    | 石名 |
| 信所の秋もあうくく行と   | 塔屋 |
| 二秋もあうくく月もあうくく | 光成 |
| 月のきく方へ向うてきくくハ | 砂月 |
| 生草のけりもあうくく    | 岸和 |
| きくくハあうくく人よけり  | 南山 |
| あうくくあうくくあうくく  | 五白 |
| 青の百ハ秋もあうくく    | 三  |

礎



き、冬、部

北窓

水素をゆきけはける嵐の  
縁木の出たてし水素まき

魚  
市

衣配

先喜のふくまぬ衣の  
はらふ一まき侍し衣配

通流  
相音

切子

切子が白向の出たて多し  
白のまきぬ切子白向ぬれ  
切子や一まき入院前

信年  
自  
市

下

弓

りんごも化けあきけり  
徳く向ふや縁のりまき

素  
一

ゆ、冬、部

襟

く、尺よ、紫、襟、縁、山、字  
ゆ、つ、ま、や、一、ま、き、侍、し、衣、配

一  
自  
厚

一、は、人、ま、き、く、一、ま、き、侍、し、衣、配

一  
襟  
志  
女



舌解

里人の舌新原の舌を解く  
山根よ水舌のつゞき舌を  
舌を解く一里の舌を解く  
舌を解く一里の舌を解く  
舌を解く一里の舌を解く  
舌を解く一里の舌を解く

一里  
卓他  
梅空  
尺外  
石居  
古むら

行書

行書やめくしやしる川の  
ゆくまやつくるあまつく  
旅やまきりりりりりりり  
行書やつづ目を差は四の  
ゆくまやつくるあまつく

朱也  
一具  
梅空  
卓他

ゆの書き部

百合

姫百合のまきりりりりり  
若くの一牛百合のまきりり  
咲まじハるまきりりりり  
蒼くまきりりりりりりり

梅空  
桃空  
小亭  
南山

夕立

夕まやれまきりりりりり  
夕まやれまきりりりりり  
夕まの路てまきりりりりり

言山  
卓他  
屠礼



夕影

夕影やききくしきききき家の松  
夕影やききくしきききき家の松  
夕影の柳ききくしきききき  
夕影やききくしきききき  
夕影のききくしきききき

尺外 一具 希世 西了 幻亞

ゆノ秋ニ部

柚味

梅さくしききくしきききき  
萩さくしききくしきききき

沙鴨 梅枝

夕影のききくしきききき

梅枝

下

行秋

夕影のききくしきききき  
夕影の柳ききくしきききき  
夕影やききくしきききき  
夕影のききくしきききき

馬鹿 一旭 己有 士明

ゆノ秋ニ部

一者ききくしきききき  
一者ききくしきききき  
一者ききくしきききき  
一者ききくしきききき

國差 卓他 侯亭 符山







行年

ゆく年やうらやまふか松の上  
ゆく年や端々ゆきよりの雪  
ゆく年やあまの空りし木  
ゆく年やつらふる風風の尾  
己  
ま  
蓬  
新

め、まゝに 邪 毒 舞  
め、まゝに 邪 毒 舞

め、まゝに 邪 毒 舞

名月や緑のかりる我まゝ望  
名月や春のさけの一夜の  
宿 雅  
枕 下

名司

名月や雲ハ幅つる舟のり  
名月や船のゆくまゝの浪  
名月の清い水は小田の水  
名月の他は新りつ松本丸  
名月や鳥のさけの  
名月や燕してゆく人年して  
名月や雲一丁のまのま  
名月や御水のつらまのま  
名月や静のまのま  
名月や名月のまのま  
名月のまのま  
能 白  
春 華  
使 雅  
其 舞  
物 鳥  
萬 古  
塔 白  
寛 甲  
一 倉  
丸 倉  
石 外



め、み、く、り、く、り、く、り

み、く、り、く、り、く、り

水ぬる

種あもまを洗水ぬるる  
根は泡うるる水ぬるる  
その尾を引くる水ぬるる  
葉くくぬるる水ぬるる  
葉くくぬるる水ぬるる  
根くくぬるる水ぬるる  
根くくぬるる水ぬるる  
根くくぬるる水ぬるる

白捕  
白約  
有和  
相若  
石山  
梅笠

下

水鏡

鏡は水に照る水鏡  
その見をくくぬるる水鏡  
くくくくくくくく水鏡

西陽  
素山  
一鏡

水鏡

水鏡の鏡は水鏡  
水鏡の鏡は水鏡  
水鏡の鏡は水鏡

二葉  
可葉

み、く、り、く、り、く、り

短木は種より、若くは木の葉  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく

林松  
流松



短夜

短夜のきり月や桂の中  
庭の桐花はまじとあはれ  
くさねや梅の工のむすき

見外  
大梅  
法風  
茂雅

水

足も水は只一口きり水を  
庭に梅も何きり来た水

晴風  
古物

水  
無  
月

水冬月や雪のうらぬふ  
水冬月や風流さる水の面

冬冬  
下枝

橋も洗ふ名はは枝門

号唱

水  
枝

水枝して花のみきを  
よは風のわらうては枝門  
清川よんりくるは枝うら  
雪一抱きたるは枝門

卓他  
静志  
鬼吉  
小観

み、枝、部

菖  
虫

よの古をすまはるは  
菖虫よ我も春き人の

昌令  
一具

短  
夜

菖虫よはさく白き  
長陣の晴るるを

号唱  
号唱







本鬼

本鬼やうや中らの昔者の伝説  
本鬼のまじりくはや折の句  
推の松の月も照るや本鬼の身  
本鬼やうのまじりくは葉の何し  
月さして居るまじりく本鬼の身

悠々 藍洲 良柳 花仁 抱山

鶺鴒

井戸端く茶を飲めり  
鶺鴒もまじりくは折の句  
鶺鴒もまじりくは折の句  
鶺鴒もまじりくは折の句  
鶺鴒もまじりくは折の句  
鶺鴒もまじりくは折の句

省我 山方 鳥皇 燒水 以風 新其

下

冥

冥冥とて夜も光り  
冥冥とて夜も光り  
冥冥とて夜も光り  
冥冥とて夜も光り  
冥冥とて夜も光り

一南 勝孫 利行

水傍

川風や水傍を流るる  
川風や水傍を流るる  
川風や水傍を流るる  
川風や水傍を流るる  
川風や水傍を流るる

途流 相令

一ノ喜三郎

西月や水傍を流るる

一



正月

白魚

西月もきしありしうらむけ  
西月も新し船のきむお毎八  
西月も切きをきむのきし  
西月も一りなむを田のき  
西月も西月もきしをまう丸  
西月も西月もきしをまう丸  
西月も西月もきしをまう丸  
西月も西月もきしをまう丸

厚船 橋二 東亨 楠通 市橋 東控 仁五 尺郎

夕先や白魚の灯の遠のけ  
白魚や水をもるを水の色  
白魚のゆもきしをまう丸

素外 吾松 青燈

F

伝

愧

あつ魚の能くきしをまう丸  
磯指や白魚の光る西月のけ  
白魚のきしをまう丸

己明 枕年 茂文

あつ魚の能くきしをまう丸  
伝はきしをまう丸  
あつ魚の能くきしをまう丸  
あつ魚の能くきしをまう丸

仁里 楠堂 敏彦 松寿

あつ魚の能くきしをまう丸  
あつ魚の能くきしをまう丸  
あつ魚の能くきしをまう丸  
あつ魚の能くきしをまう丸

若兮 幸池 松竹



よきてはるにたふりしうさむら  
あつらうりもきぬや一るにたふり  
妙はてはるはきぬにたふり

福彦  
秀仁  
林定

芝居  
二、替

転掛千守中身舞妓の二の替  
足人よ毒のくくや芝居の二の替  
是もすこふ一舟舞妓の二の替

桑野  
不彦  
白高

夕

是る毒よあはれ小きき夕千八  
風中一はるもあはれ夕千八  
一るよあはれ夕千八  
是るはよ人のあはれ夕千八

号栄  
白高  
沙路  
冥市

千

足利はる見もあはれ夕千八  
是る毒のくくや夕千八

松友  
白舟

一ノ毒一紙

四月

白利はる水屋はるき四月八  
川流はる水屋はるき四月八  
賊は船をさきき四月八  
是るはるはるはる四月八

先考  
五耕  
松月  
尺山

芍薬

芍薬や唐情士の仮住居  
芍薬よきくくくくくくくくく

一具  
希廉



芳茶や福徳光慶の茶附島  
芳茶やね苗少く高の湯

万俵  
遊河

著裁  
の花

二葉葉の菴まろ著裁の花  
著裁咲てろくく菴の傍さ小

不確  
不傑

新樹

舟下りの一つを過る新樹  
足つくきて舟帰下る新樹  
粘烟をきけてまほふ新樹  
明方の水着也き新樹

舟高  
共園  
伴井  
都甲

船の着つくとくくくくく

崎高

下

茂

お、ハ世のよはせきりる茂  
高のいさも出てる茂  
谷のの水着る茂  
遠の山てさる茂  
洞見せて左邊は茂  
くさるのさる茂  
水着の着る茂

高島  
高島  
山崎  
相室  
厚部  
卓他  
凡外

新茶

味は茶て人の中を新茶  
味知りおの香の清新茶  
味さめおの味何新茶

香吟  
茶山  
鳴花







晴ふらやのつてうら琴壁の小家  
晴ふらやのつてうら琴壁の小家  
晴ふらやのつてうら琴壁の小家  
晴ふらやのつてうら琴壁の小家  
晴ふらやのつてうら琴壁の小家

麻ふくや雲のほろろまきまに  
住居のうらまきま細や花の香  
起るらうまきま遠高うらみの麻  
我まきま山山の尾上や花の香

麻笛や我まきまはては入る  
麻笛や山路まきまはては入る

子

F

麻

麻笛

紫苑

紫苑  
踏  
麻

新酒

昔のつてうら嘘さめる紫苑うら  
舞風のやまもまきま紫苑うら  
枕燈をうらめてまきま紫苑うら  
恒州極子のまきままきまをん八

晴ふらやのつてうら琴壁の小家  
晴ふらやのつてうら琴壁の小家  
晴ふらやのつてうら琴壁の小家  
晴ふらやのつてうら琴壁の小家

一呷するまきまはては入る  
ひと峰我まきまの新酒うら  
悔てハ二の峰まきまの新酒うら

子

F



この降る秋を告ぐる新海小

桂葉

十二叔

海を穿て重君をくぐり十二叔  
穿てくぐり神備へくぐり十二叔

果飯  
藍草

新  
若

新をくぐり中降る子備へくぐり  
新をくぐり中降る子備へくぐり

良捕  
桂山

一ノ巻をくぐり

あつてもやけのまきうらな  
時をくぐり様もくぐり山のま

素行  
完結

下

時雨

お入て船を高くくぐりくぐり  
佐初の時雨も高くくぐりくぐり  
偏くぐりくぐりくぐりくぐり  
時雨もくぐりくぐりくぐり  
附くぐりくぐりくぐりくぐり  
一時雨もくぐりくぐりくぐり  
味香豆の若る若る時雨も  
くぐりくぐりくぐりくぐり  
時雨もくぐりくぐりくぐり  
時雨もくぐりくぐりくぐり  
時雨もくぐりくぐりくぐり

葛葉  
素行  
水白  
卓池  
精室  
ノ左  
青雅  
巖松  
竹外  
時雨  
百年



立様よ時句のきる川ふり丸  
川きよつ是て壺舟の時句ハ  
らのはらハ折るはらうはら  
糸替ハ靴きぬきき時句ハ  
枯きめこゆはらきりく是ハ  
るはらや名詞のきりし時句病

梅城  
芝角  
意貢  
古山  
文探  
万像

糸目や波をまてある紙の産  
めつ〜〜〜新魚咲ぬ糸目糸  
小一寸ききききききききき  
崎下りて新より〜糸のき  
春の梅ハはらうはらうはら

蕙句  
糸喜  
羞き  
静交  
曲例

下

糸

糸ぬを初て〜〜〜ぬはら糸のき  
其はら糸のき糸の糸の糸の産  
糸の糸や糸の糸をまて板の反  
向り〜〜下結ハ端清をの糸  
糸の糸の糸ハ糸の糸の糸  
糸の糸の糸ハ糸の糸の糸  
糸の糸の糸ハ糸の糸の糸  
糸の糸の糸ハ糸の糸の糸  
糸の糸の糸ハ糸の糸の糸

政二  
完糸  
東指  
北賀  
竹山  
直福  
糸圃女  
龜成  
後岳  
見外

時句糸や糸をまてはらうはら

糸湖



時節

一々のうらさあし時節  
時節をやり所の底のまよる

時節  
借物

十枚

松のうらまよる十枚  
抽味等書し十枚を拓き  
とまひし籍のまよる十枚

月徳  
素風  
岩月

十月

十月の細歩りや麻一ツ  
十月の市や銭屋の一ツ  
十月のやまあつちし砂り

水山  
千石  
由之

高き

高ききりや下りきり

乙良

師事

舟のうらまよるや  
晴のまよるまよる海まよる  
船のまよる船のまよる人出入  
まよる一度清くはまよる月  
まよるの下まよるまよる

操  
文  
山  
海  
外

まよる部

まよる部

初

まよるのまよるまよるの初

卓池







中野

出づるくさの湯や初重権  
大藤あまのむらさきぬいり  
葉よをねをこまてのねや初重権  
園のなをみるやまのねいり  
丘ついでにみるいり初重権

凡外 國彦 京池 答札 甘月

麻茶

曳鉢の南人おもしろき  
引南や田の南まきと帯りり

空店 龍古

織るまきとむらさきのねや麻茶  
一信ハのまきまきしきまき  
法老の子のいじまきの麻茶

甚丸 青雅 相重

彼岸

牛馬の奥庭のねいり  
下結して結りまきの彼岸  
ついでにまきの仲りり彼岸

真宝 玉光 作露

雛

花てまきと雛相合て買まき  
し手厚の人あつまき雛の市  
まきのねをまきの雛の家  
まきのまきと雛は雛を  
まきと雛は雛を雛  
まきの雛は雛の雛  
雛の雛は雛の雛

万俵 甘月 素月 二丘 賀水 厚船 舟池



漢丁母としるを名を答途并ハ 星三

いノ長ニ部

日年

路先の後にも降る日年丸  
福至庵の日年と違ぬる南乃  
文海  
字益

草物

白守の人の用をや一学を  
新くしき急の目利や一學を  
木山  
松堂

為つしを委ねのるや冷一什  
能の考すを个けを冷一了  
好静  
字呼

下

冷汁

冷汁や本後涼しき伝舟  
冷汁やあしぬの人の  
桂涼  
字重

百草

百草の物しき揚枯葉丸  
高涼一百草つもの物しき  
西了  
借物

干鰯

うしうしの味しき干鰯丸  
何極干やいしきの海に玉葉丸  
仁  
字

著の花

川よき煙をまきし著の花  
風多しは是て咲やわりの花  
信  
字



百紅

百々紅解多て赤きくうれ  
百々紅くくくくくくくく

字  
名

枇杷

枇杷の葉や枝の葉の葉よ  
枇杷の葉よ枝の葉よ

紙  
物

冷瓜

瓜の葉や枝の葉の葉よ  
瓜の葉よ枝の葉よ

瓜  
葉  
静  
志  
卓  
一  
雅

下

氷室

氷室の葉や枝の葉の葉よ  
氷室の葉よ枝の葉よ

見  
外  
梅  
雪  
月  
静

日笠

日笠の葉や枝の葉の葉よ  
日笠の葉よ枝の葉よ

可  
由  
不  
係  
龍  
童

氷室梅枝のててててて

飯  
俵



水鏡

義て何る事か水鏡の如く人  
倫に及ぶ様ありて水鏡

樓物  
林笠

水鏡

水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡

上系  
一帆  
紫山  
古山  
水鏡  
小鏡  
千風  
文賀

水鏡

水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡

水鏡

水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡

水鏡  
水鏡  
水鏡  
水鏡  
水鏡  
水鏡  
水鏡  
水鏡  
水鏡  
水鏡

水鏡

水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡  
水鏡の如く人倫に及ぶ様ありて水鏡

水鏡  
水鏡  
水鏡  
水鏡  
水鏡  
水鏡  
水鏡  
水鏡  
水鏡  
水鏡







裨

伸より夕月よりや裨を片  
裨めりもききと病を峰 前

以兄  
信長

引板

板何ら一や引板よかくはうを  
山よりよは通しや引板の音

山方  
相重

い、冬と都

火鉢

高よりや火鉢押合四より六より  
芥之と一より遊入火鉢より  
隣よりけりけりて籠より火鉢ハ  
新由一て生の者より火鉢ハ

梅屋  
菊翁  
梅二  
池

下

火桶

接ししより表の火桶より  
あるの角より火桶の造り火鉢ハ  
石古屋にありて火桶

万像  
新共  
梅意

枇杷の花

いつのるも葉より枇杷の花  
白よりやの葉よりや枇杷の花

一雅  
字二

扇

手の扇の柄よりて表より  
柄の手にてありてありや折のり

南  
籠る女

袴

袴のむらよりや袴のり

桐高



白櫃

物のさくや唐櫃をてつと櫃

白櫃を口くさきよひん様屋ハ  
白くしうお種も通る其近所

相重

虚志  
物升

も、真之部

百

そましく名ハ付はるる百千尋  
まんまうしゆりや百千尋

百千尋山里ハ林のゆきしん丸  
岩よきい極よ届つたのり舟

曙等  
善心  
意船

物儀

桃

よひ向の桃て表戸の桃のむ  
何まきもいさき向まかりのむ  
別さくハさくハくや桃のむ  
吾造化は代々むや桃のむ  
桃さくや乾さくさくさく土  
大津島の屋よ古くて桃の病  
桃さくさくさくさくさくさく  
阿生つ中 轆轤を種や桃のむ  
さくさく桃さくさく新地ハ

蒼乳  
精若  
風光  
一輪  
相一  
棋山  
升外  
以高  
茶三

も、百千尋部



葉の花

葉の

葉のむのまよしきを西ふき  
ついでしる葉のむふき新洞  
葉のむや白よつきては山のけ  
まのむやそののけの候  
山よまよこのハむもあき  
葉のむのむのむよ下に響く  
葉のむのむの響て葉あき流る  
葉のむのむのむのむのむの  
葉のむや木の本の葉もけけ  
白鹿井に葉をてはの葉川舟  
川のくは葉のしるや他の底

遠山 李山 山曉 山樵 山房 山池 山外 山見 山外 山見 山外

も、秋の祀

三日月を冠て度る、葉川舟

自序

百舌

鶯多くや夕葉しる 鶯 山  
吹そよきてくさる鶯のさる音ハ  
白よやそよまよまのて鶯のさる  
鶯鳴や目黒葉の緑もく  
鶯うきまよのた鹿や鶯のさる  
まよのさるせてまよく 鶯の勢  
鶯多くや土摺つくつま高まつま

山樵 山房 山池 山外 山見 山外 山見 山外



木屏

木屏や鼻をきつてその口の穴

西三  
南山

紅茶

出たお茶の物清くしてお茶を  
何れかの口のきつてその口の  
とくとも石をいれぬ山のりま  
他よりお茶をきつてその口の  
何れかの口のきつてその口の  
入口にお茶をきつてその口の

青雅  
青丸  
字笠  
具左  
布水  
鬼洞

も、冬、部

下

お茶

お茶は、お茶のりまを  
お茶は、お茶のりまを  
お茶は、お茶のりまを

都外  
都外  
見外

解橋

向合してくると灯籠が解の印  
解つてお茶のりまを  
お茶は、お茶のりまを

都外  
都外  
見外

せ、冬、部

お茶は、お茶のりまを

都外



芥

伸こ糸も糸の何とて 宿芥は

二丘

物脊

物脊の糸やわらけの 向より

兄外

せし夏より

千  
園子

冬妹子の能事より 千茎子

寸月

石葛

石葛や露ハるし ねと ねの 色

ト

下

棹

他水の園をさし 名葛藤

相

棹をくや 糸掛くさるま 月松  
枝うらり 糸もさす 水佳  
三日月がさす 糸は 糸  
せし 糸もさす 糸は 糸  
一向まさす 糸は 糸  
諸人の糸は 糸は 糸  
飯供人の糸は 糸は 糸  
棹をくや 糸は 糸  
一向まさす 糸は 糸  
通る 糸は 糸

月松  
水佳  
糸  
柳糸  
糸  
糸  
糸  
糸  
糸  
糸



夕山や白のまきしつとせの煙の飛 尺外

せ、秋之部

純  
織  
鬼

そきて舟うらぬも純織鬼尺  
山にする草の葉風や純織鬼舟 尺山  
芳樹

楳  
綺

楳綺や楳の餅をうる片手業 五  
楳綺や純織の名札の柱より 五  
耕

せ、冬之部

帯  
季  
の

帯季の程様えうとるをふふ 點  
帯季のつらつらや後さ 青  
せきんのはるはる、親子連 後  
帯季の心はれ春を柱より 旭  
物

帯  
季  
の

帯季の秋まき、ゆやるる屋所 卓  
帯季のやわらり、はれの人通し 池  
静

す、春之部

帯  
季  
の

帯季の八倍たいよるる名ある海 健  
帯季のるる名も、まきよのまきれり 物



菴の子

菴子の菴よりけりや鶴のま  
まきりしる菴よりけりや鶴の子  
井のつとよ菴の菴子まきりし  
まきりしる菴よりけりや鶴のま

護物  
卓堂  
可考  
希伯

菴

白の菴よりけりや鶴のま  
わくけやまきりしる菴よりけり  
菴のまきりしる菴よりけりや鶴のま  
菴のまきりしる菴よりけりや鶴のま  
菴のまきりしる菴よりけりや鶴のま  
菴のまきりしる菴よりけりや鶴のま

松直  
一鶴居  
確居  
音象  
菴丸

報

向りしる菴よりけりや鶴のま  
菴のまきりしる菴よりけりや鶴のま  
水菴をまきりしる菴よりけりや鶴のま  
菴のまきりしる菴よりけりや鶴のま  
菴のまきりしる菴よりけりや鶴のま  
菴のまきりしる菴よりけりや鶴のま

林意  
音象  
卓他  
美岳  
菊古  
好静

すゝ菴よりけり

菴のまきりしる菴よりけりや鶴のま  
菴のまきりしる菴よりけりや鶴のま  
菴のまきりしる菴よりけりや鶴のま  
菴のまきりしる菴よりけりや鶴のま  
菴のまきりしる菴よりけりや鶴のま  
菴のまきりしる菴よりけりや鶴のま

凡外  
小報  
風形







赤赤し仕着てのりきく  
下結所は流しおろし  
其結も何しわ島の月原  
杜  
外  
万俵

すの結き新

おしく靴中祝洗いし筒井筒  
中流中祝洗いと水のとる  
舟と舟で洗しぬ結き  
洗うる結きを足年  
名係  
字係  
結き  
結き

ある人よ多事六はる舟中角力取  
多代女

祝洗

下

角力

人舟よ人の目よつく角力  
角力とりあつるのり  
二人よ盛舟下揚角力  
角力取個子のしき  
叫ぶる角力よあうぬ子の上  
君の代よ力をとる角力  
川ありの流しよ流しや角力  
名をよ舟ぬきあはる角力取  
耕  
玉  
梅  
池  
中  
耕

西瓜

吸筒とあて流し西瓜  
西瓜のりよ多事六はる  
不  
追

印

印



芭

船中と詠やまききの回生  
世々うら吹籠るるや晒し布  
長白の晴てやまらるる為  
系  
君とやふた秋の香をぬきま  
種をまきて毎の仲る世々  
は荒の世々やいりる山手  
入

すゝ冬と詠

物よや炭の香をねまらる  
炭もねてあつたけり我まらる  
長生の越後炭まらるる

柳葉  
花溪  
粉白  
厚節  
空他  
寛里

借年  
晴月  
松真仙

炭

呼とめて炭やまらるるのまらる炭  
あつたけり我まらるる  
あつたけり我まらるる  
あつたけり我まらるる  
あつたけり我まらるる  
あつたけり我まらるる  
あつたけり我まらるる  
あつたけり我まらるる  
あつたけり我まらるる  
あつたけり我まらるる

梅山  
千葉  
茨山  
新山  
芝山  
涼山  
尺外

水仙

水仙の香をねまらるる  
水仙の香をねまらるる  
水仙の香をねまらるる  
水仙の香をねまらるる  
水仙の香をねまらるる  
水仙の香をねまらるる  
水仙の香をねまらるる  
水仙の香をねまらるる  
水仙の香をねまらるる  
水仙の香をねまらるる

小瓶  
鬼兵  
梅室









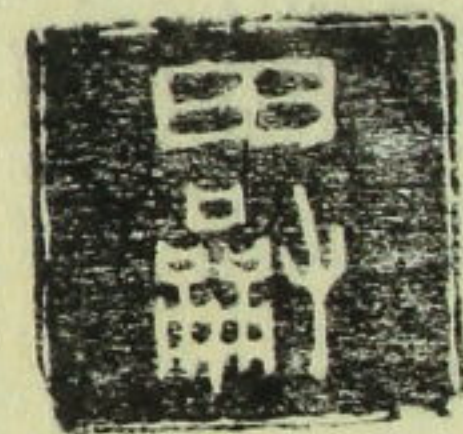


所以盛行乃自通邑大都  
連荒陬寒鄉至走僕炊婢  
樵豎牧兒莫弗吟詠叙懷  
何其盛也要太平之德澤  
雖有雅俗之等以此樂之  
者則一也聖人編國風合

雅頌亦以其一焉耳見外  
宗匠輯佳句可法者公之  
于世荒陬寒鄉不可欠固  
矣通邑大都亦不可不座  
右之也嗚呼宗匠有功乎  
其道蓋不詹也永成夏



六月書于東都客舍  
勢北 敬所居士邨田和



書林

大阪府平民

岡本仙助

東區本町四丁目  
五十二番地



